〔節用集土言語〕屯食（トンシキ）

〔資治通鑑百九十唐高祖〕武德六年六月戊午、先是前并州總管劉世讓、除廣州總管、將之官、上問以備邊之策、世讓對曰、突厥比數爲寇、良以馬邑爲之中頓、故也、中頓者謂中道有城有糧、可以頓食也、置食之所曰頓、唐人多言置頓、

〔藻鹽草十九食物〕飯

とんじき　屯食とかく、つゝみ飯と云もの、下臈にたぶくいもの也、源氏、

〔倭訓栞前編十八〕とんじき　記錄に屯食と書り、下臈に給ふ飯の名也といへり、唐玄宗紀に、頓食と見え、通雅に頓は是食也、置食之所曰頓といへり、物語にとじきとも書り、源氏爪印に、つゝみいひ也、今の鳥の子と同じといへり、

〔貞丈雜記六飲食〕一屯食と云は、にぎり飯の事也、○中略　強飯を握りかためて、鳥の玉子の如く丸く少長くしたるを云也、今も公家方にては握食をどんじきといふ由、京都の人物語せり、

頭註、屯ノ字、アツムルトヨム、飯ヲ握リアツメタル也、

〔類聚名物考飲食四〕屯食　どんじき

案に、屯は字書に徒孫切、音豚、聚也、漢律勒兵而守曰屯、說文本屯亶字、假借爲屯聚之屯と見えしによれば、聚（アツマル　アツム）字の意にて一聚の食といふ、一村々々有をいふ歟、今江戸の制に、御成の時、御配りとて辨當を賜ふ、少しの飯を盛分たるものなれば、是等の意なるべしと思ふに、又大慧書をみれば、呼幾枚杜撰長老來、與一頓飯喫却了、教他恣意亂說と有は、一頓飯とは、一膳の飯といふにおなじ、字書を考ふるに、頓都困切、增韻又貯也、又宿食所也、次也、又食一次也とも見え、又文字解詁には、續食曰頓ともあり、是等の注によるに、食一次也と有とぞ、よく此意にあたりて、一度の飯といふが如し、六書正譌には、頓別作鈍非也とも見ゆれば、鈍頓を俗には通はし用ひしなれば、又省て屯とも書しなるべし、此二意にて大底心得らるゝことなり、